

幕末期佐賀地方の助詞：「滑稽洒落一寸見た夢物語」を中心にして

篠崎，久躬

<https://doi.org/10.15017/12301>

出版情報：語文研究. 15, pp.26-36, 1962-12-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



幕末期佐賀地方の助詞

—「滑稽洒落一寸見た夢物語」を中心にして—

篠崎久躬

一、はじめに

資料として用いた「滑稽一寸見た夢物語」については、吉町先生

が「文学研究」五十二輯に、本の体裁など解説を附されて忠実に翻刻されている。序文末の識語「于時慶応三ひのと卯弥生下流 案間坊暮成」によって、その著者案間坊暮成については不明であるが、成立年代は明らかである①。内容は日峯祭の佐賀市内光景を方言を踊らせて描いた滑稽本であるが、上巻は幕末世相を写して当時兩端を保持した佐賀藩の立場を示し、中巻は方言が横溢して郷土方言資料となる②。序文に

狂言俚語の補綴は軽薄浮虚にて述著威重になき世の人口の責を防禦に術計なく餘り好しからざる芸といへども……③

とある通り、この書には佐賀地方のことが横溢している。上巻にはそれも余り見られないので考察の対象としないが、中巻においては佐賀藩内の各地のことは（佐賀市及びその近郊や北山、武雄有田、諫早）、老若男女のことは、各階層のことは（役人、侍、医者、

書生、田舎者）など、一般庶民を中心とする各種各層のことはが浮きぼりにされていて、誠に貴重な資料となっている。

以下この書を中心に、幕末期佐賀地方の助詞の二、三について述べるが、なお殆んど同時代（文政年間に起稿し、三十数年経て摺筆）の成立であり、佐賀方言資料たる「伊勢道中不案内記」もこの際大いに参考にせねばならない。この書については東条氏の論文を参照されたい④。

用例は、「一寸見た夢物語」は吉町先生の翻刻本、「伊勢道中不案内記」は肥前史談会刊行本により、（ ）内にはその頁数、その次に使用者あるいは使用地域を示した。

なお、幕末期佐賀地方の語法に関する拙稿に次のものがある。併せて御叱正を賜わりたい。

幕末期佐賀地方の用言（「国語研究」の号）

—「滑稽洒落一寸見た夢物語」を中心にして—
幕末期佐賀地方の助詞（「言語生活」二〇号）

幕末期佐賀地方に於ける文末助詞

——「滑稽洒落一寸見た夢物語」を中心に——

(「解釈」82号)

〈注〉

①滑稽洒落一寸見た夢物語 吉町義雄(「文学研究」五二輯四八頁)

②同右書四七頁

③注①書眉頁

④伊勢道中不案内につき 東条操(「佐々木信綱博士還暦記念論文集

日本文学論纂」)

二、人称に関する助詞「の」「が」

現在九州地方で使われている主格、属格表示の「の」と「が」に、敬卑感情上の用法差が見られる①ことは既に周知の通りであり、その他中国、四国地方の一部にもその別がある事も報告されている②。この状態は、やはり現在佐賀地方にも見られることが清水平一郎氏③や小野志貞男氏④によって指摘されている。また私が行なった湯江地方(旧佐賀藩・現在長崎県北高来郡)の調査では、「が」は「の」に対して、馬鹿にした所はないが、年下かあるいは兄弟、自分の子供の様な親しい者の間に使う事を、土地の一人人は語ってくれたし、この老人(八〇才)と一老婆との対話中、老人のことは出て来た「ヨネロクサンノ」(老人の兄嫁の弟、六五才)、「トヨシロ一ガ」(妻の弟、五六才)は、はっきり右の状態を示している。また、最近の長崎県大村地方の調査でも同様な結果を得た。

このように現代方言における人称に関する「の」と「が」との使

用差は、かつてわが国の中央語に存していた事が、かのロドリゲスの大文典⑤やコイヤードの文典⑥によってうかゞえるのである。つまり、人が主格、属格に立つ時、一人称には「が」、二人称には「の」、しかし特にその人を軽蔑する場合は「が」、三人称には尊敬すべき人には「の」、軽蔑すべき人には「が」を使っていたと記している。

江戸末期佐賀地方の状態を眺めてみよう。まず一人称について、一寸見た夢物語には、

おれがかせぎ出してふとめて置たア金玉ア(五三) 北山辺の者

私キガワアヤ二階から三階へおッこちるもんかア(六一) 諫早

おどんが辺の堤、チウもんナア(五五) 武雄有田

おどんが見当がチットちがふたカノウ(五六) 在郷

など、すべて一人称に関しては主格、属格のいずれの場合にも「が」助詞を使用している。やはり同時代の同地方の文献である伊勢道中不案内記に、供人が自分に「が」をつけるのは当然の事として、主人公である愚津郎兵衛がそのことばの中に

何に愚者かとに当りをつたか、面白い面白い(九一) 愚津
などと「が」を用いている事は大いに参考になる。

次に二人称についてみると、「の」助詞をとる場合が非常に多い事は当然の事として、「が」助詞をとるものが次の如く三例存する。

風毛たもんどんが尤是も久しく何事もなかケヘニ(五六) 町方
老人

サヨく貴様がいふ事(五九) 侍

主しが内シのとハ一階ちやらふばん(五九) 諫早

これらの用例について検討すると、最初の「風毛たもんどんが」は馬鹿者々と町方老人が、間違つた考え方をしている在郷の者をたしなめたものであり、次の「貴様が」は、日峯祭を見に来た諫早の者に対して言っている言葉である。従つて、いわば侍が田舎者を軽蔑したことであり、最後の例は「コヲワイハ風毛タア事ばかりいふ人ノウあいが二階チウこんならふ」に続くことばであるので、最初の例と全く同じ様なものである。今見た如く、二人称は一般に「〇」を用いているが、特に相手を軽蔑する場合「が」が用いられている。これはやはり伊勢道中不案内記の次の用例と同じである。

して、その方共が名は何と申す(五七) 愚津が女共へ向つて最後に三人称の場合についてみると次の如くなっている。

(イ)、「〇」助詞をとるもの

役人どんの棒ンバ以てくらはせんサルバン(六〇) 諫早

おくろうばうさんハ祖父さんの腰にユウががり付ておいナサ

イ(五三) 北山辺の者

よし経どんの形見チウテへ呉さした……(五五) 武雄有田

白山町の者共が公家ノまねしてはやしする処ばん(五九) 佐賀

女

(ロ)、「が」助詞をとるもの

白もんどんが仕出アておるばん(五二) 北山辺の者

ぜんもんがして来る鐘燧大臣のごとして(五七) 在郷の人か

ござどんがア三味引いていくらでも居るばん(五九) 諫早

是ハ定て石川五衛門が幽霊の出た処でがな(五九) 侍

などとなつてゐる。このうち「〇」助詞をとるものは、いずれも尊敬すべきか、あるいは年上の者に対してであり、それに対して「が」助詞をとつてゐるものうち「白もん」は「女」、「ぜんもん」は「乞食」、「ござどん」は「女乞食」の俚語であり、更に石川五衛門と、いずれも軽蔑すべき人物に対して「が」を使用している。これは、先の二人称の「の」と「が」との使い分けと同じである。もはや用例を示す必要はないであろうが、やはり伊勢道中不案内記でも同様な状態である。

以上により、江戸末期佐賀地方における人称に関する主格、属格の「の」と「が」との使用差を次の如く言える。人が主格、属格に立つ時、「の」と「が」とに中世末期中央語に見られたような用法差が明らかに存すること、つまり一人称には「が」、二人称には「の」、しかし特にその人を軽蔑する場合には「が」、第三人称には尊敬すべき人には「の」、軽蔑すべき人には「が」を用いている。たゞし、二人称の「の」の尊敬の度合は、一人称の「が」が特に自分を卑下したものでないのと同様、必ずしも強いものではないこと、次にこれら「の」と「が」との使い分けは当時佐賀藩内のあらゆる所、少くとも先の例からわかる通り、佐賀及びその周辺、北山、武雄有田、諫早地方に存していたといえる。

△注▽

①文法 藤原与一(『日本方言学』二八六頁)

②「隠岐ノ足摺岬」の線で見た中国四国方言 藤原与一(『方言研究年報』二卷一六〇～一六一頁)、藤原与一『日本語方言文法の研究』二五〇、二五六頁

③清水平一郎「佐賀県方言語典一斑」一三六—一三八頁

④佐賀・長崎 小野志真男「方言学講座」四卷二〇三頁

⑤土井忠生訳「ロドリゲス日本大文典」八—九頁

⑥大塚高信訳「コリヤード日本文典」六頁

三、方向を示す助詞

方向を示す助詞として一寸見た夢物語にはその用例が余り多くないので、同時代の同地方の文献である伊勢道中不案内記及び同時代の隣接長崎地方の文献である筑紫方言の用例をも併せて述べると、方向を示す助詞として次の如きものが用いられている。まず「に」が

そここゝに行にも道がとんとなくなり（五三）三反田辺の社人

然し美婦人の多ひ方に行が二番じや（五四）書生四人連れ

愚僧杯も一夜野辺につれていて（五五）禪僧

〔以上、一寸見た夢物語〕

播州荒々見物致して、大坂に罷越したい（一〇七）愚津

よし／＼国元に罷下り盜賊方に申達し（一五七）愚津

〔以上、伊勢道中不案内記〕

などかなり多く用いられている。これら方向を示す「に」については、既に室町末期にその使用が「へ」に対して局限されて来ていた①らしく、ロドリゲスもその大文典中の「場所に関する間に就いて」の項で

この間に關して日本の諸地方で色々な助辭を使ふ事は注意しなければならぬ。‘都’ (Miyaco) では助辭 Ye (へ) を用ゐる

るが、これが正しいのであって、すべての語の方のうち勝つてゐる。‘た’ (Ximo) では大體方の助方で Ni (に) を用ゐる……②

と述べているし、コイヤードもやはりその文典の中でこの事に触れている③。この様に方向を示す助詞「に」は、当時中央語では余り使用されていなかったようである。降って江戸末期江戸語では地位、方向などの別なく、移動を示す助詞の場合には「へ」を用いるのが普通であった④。従つて、中央語で中世末期から「へ」によつて侵された方向を示す「に」が佐賀地方では江戸末期においても、なお残存していたのである。

次に「さみゃー」が一寸見た夢物語に一例、「さへ」が伊勢道中不案内記に二例、「さに」が筑紫方言に一例次の如く用いられている。

ノウいのちのおんちよふハどこさみゃアいたチウ（五四）書生四人連れ

〔以上、一寸見た夢物語〕

お前さん達に別れて、ひとり内さへへち戻らうかと思つた、
（一九二）重八

旦那さんばかりは宮寺さへへ参ればやかましようばかりいうて、
（二七四）重八

〔以上、伊勢道中不案内記〕

どこ方へ行 長崎にて

豊後にて どここにいく

方向を示す助詞として、江戸末期中央語では先に述べた如く助詞

「へ」が用いられていたが、これら「さみゃー」・「さへ」・「きた」に「に」と同じく佐賀地方では用いられていたと考えられる。これらについてもロドリゲスは既に中世末期、九州方言として指摘し、次の如くその大文典に記しているほか、コイヤードもその文典に記している⑥。

移動を示すYe (へ) の代りにNi (に) , …… , Samaye (森へ) , Sana (ちな) など使ふ。⑦

なお、先に述べた「に」とこれら「さみゃー」・「さへ」・「きた」の関係であるが、これらはいずれも中央語の「へ」に対して用いられたとはいうものゝ、しかしその間には幾分の差があったようである。というのは「に」の使用者を見ると、一寸見た夢物語では、社人・書生・禅僧、伊勢道中不案内記では主人公という一般庶民に対してやゝ高い層に属している人である事を考えると、この「に」は当時この地方において使用されていたとはいえ、何か中央語的な感じのするものであったのではあるまいか。これに対して「さみゃー」は別として、伊勢道中不案内記の「さへ」二例はいずれも供人で方言を豊富に出している重八によって使用されていること、あるいはまた先述した如く、既に中世末期九州方言としてロドリゲスなどによって指摘されている事を考えると、「に」に対してこれら三語は当時一般の人達によって、より多く使用されていたではあるまいか。

以上の如き形が江戸末期佐賀地方に確実に使用されていたと考えられるが、現代方言としてこれらの訛形が各地で使用されていること、あるいはまた江戸初期から中期にかけて隣接地の方言資料に他

の形が表われることから、右の「さみゃー」・「さへ」・「きた」以外にも、当時佐賀地方で方向を示す助詞が使用されていたのではあるまいかとの推測も生れて来るのである。そこで江戸初・中期の隣接地域の方言資料についてみると、次の諸形が表われる。

「みなへ」

首尾能らふば筑前さなへ此舟廻し、柳町のしやうく〜て

い共請出して、上方さなへつゝ走る。⑧

おん共が胸腹さなへ当るが最期、⑨

頭抱へてやといどにかるわれ、小宿さなへ往んだがの。⑩

「さへ」

つんなふて見けいかふはひ芝居さへどくさに扇ひつくわんげお

く⑪

わかさまへいつはつてくかお国さへはま田屋なつとぐすとしか

きうつ⑫

「きた」

つんなふて見けいかふはひ芝居さへどくさに扇ひつくわんげお

く⑬

また、現代方言における諸形をみると、旧佐賀藩内では次の如き諸形が報告されている。

「さ」

オーホサーカイ 行く。⑭

コノアタリヤー マット コツチャイ コイト ユーモン⑮

「さん」

ヒカシサン 行いた。

マエサン向け。⑩
 ツイカラ、ミナミサン、ニサンチョー、グリヤー イタギー⑪
 イデガ セバカモンジャカラ ヨンニューコター ナガレンモ
 ン ツキサン ナガルルツ モー アゲントコサン キワキラ
 ンチューテ⑫
 「さまい」
 ムカウサマイ 渡れ。⑬
 「さいやー」

コッチサニヤア 来イ。⑭
 「さいやー」

右にあげた諸形を通して、方向を示す助詞の系統が考えられそうである。これを表にして次の如く整理できる。

	江戸末期 室町末期	江戸 中	初期 江戸末期	現 代
ニ	に	(に)	に	い
サ	さな	さなへ	(さなへ)	
	(さに)	さに	さに	さん さにやー
系	(さへ)	さへ	さへ	—
	さまに	(さまに)	(さまに)	さまい
サマ系	さまへ		さみやー	

() 内は推定される形

この表によって、江戸末期佐賀地方に方向を示す助詞として「に」・「さに」・「さへ」・「さみやー」があったこと、右以外に他の語があったとしても、それは「さなへ」・「さまに」ぐらいであり、他の形は考えられない。

なお、現代方言の方向を示す助詞の諸形からもこの形を考えて、橋正一氏は九州には「さまへ」・「さま」・「さへ」の三通りが行われた。今日ある色々の形は、この三つの原形の内の何れかに帰すると言われた⑭。しかし、右の表から「さまへ」・「さえ」の形は考えられるが、「さま」の形は考えられず、むしろ「さへ」―「さに」の対立から、「さまへ」に対する「さまに」が考えられる。かくして「に」の他にサ系の「さな」・「さに」・「さへ」、サマ系の「さまに」・「さまへ」がその原形に考えられ、更にサ系もこれを遡るとサマ系から出ているのではないかと思われる。

△注△

- ① 「へ」と「に」の消長 青木伶子「国語学」三四輯、助詞「へ」の通時的考察 石垣謙二(「文学」昭和十八年十月号)
- ② 土井忠生訳「ロドリゲス日本大文典」四〇七―四〇八頁
- ③ 大塚高信訳「コリヤード日本文典」九〇頁
- ④ 湯沢幸吉郎「増訂江戸言葉の研究」五五五頁
- ⑤ 福井久蔵編「国語学大系」二十巻所収「筑紫方言」一五六頁
- ⑥ 注③書参照
- ⑦ 注②書六一頁
- ⑧⑨⑩以上博多小女郎波枕(有朋堂文庫「近松浄瑠璃集」下巻、⑧四一五⑨⑩四一七頁)

- ⑭以上柳川方言沱河沙一撮 岩淵悦太郎（「方言」昭和八年二月号、⑪⑫一三五⑬一三六頁）
- ⑮清水平一郎「佐賀県方言語典一斑」一四四頁
- ⑯昭和三十五年三月、湯江地方方言採集記録による。
- ⑰注⑭書一四六頁
- ⑱佐賀県藤津郡久間村地方方言 小田寛次郎（「方言誌」十四輯七四頁）
- ⑲注⑮書参照
- ⑳注⑯書参照
- ㉑同右書一四七頁
- ㉒東北方言と九州方言との一致―助詞を中心として― 橘正一（「國語研究」三卷四号二五―二六頁）

四、接続を示す助詞

接続助詞が各地方言で種々な形を示し、方言色を豊かにする事は良く知られている。江戸末期佐賀地方の接続助詞のうち特に目立つものについて述べると、一寸見た夢物語に見える接続助詞は次の如く分類する事ができる。

〔一〕「けん」の分類

(イ)、「けん」

此うぼうか 夫そいケン瓜なが長なんカッタ（五三）北山辺の者
 おこいチウもん振ふておるけん今もふりイおるケヘニ（六一）
 諫早 〔以上二例〕
 (ロ)、「けへ」

ばちまだら打ッておつコチタテゝぬかすケヘ（六一）諫早 〔以上二例〕

(イ)、「けへに」

六十七十に成ル嬢なかどんまで産ざんまへエならんもナア御座らぬケヘニ（五三）三反田辺の社人
 腰の所へかゞり付ておれといふたアケヘニ（五三）北山辺の者
 尤是も久しく何事もなかケヘニ（五六）町方老人
 あれハ髓たしかに色が黒かケヘニ（五七）在郷の人か
 わたしがつらんへふつかぶったアケヘニ（六二）諫早 〔以上他六例〕

以上、理由、原因となる条件を示す接続助詞「けん」の分類である。これらのうち(イ)の最初の一例を除いて総て接続助詞として用いられているが、この「けん」の分類は、他の理由を示す接続助詞に比してその用例は極めて多いし、またその使用も右の如く佐賀藩内各地の人が使用していること、次にこれらのすべての用例は、後述する如く当時の佐賀方言資料又は九州（主として肥筑）方言資料に見えていることから、これら理由を示す接続助詞としてこの「けん」の分類が江戸末期佐賀地方で一般に使用されていたものと想像できる。

さて、これらの助詞(イ)の各語は今述べた如く、当時の文献に見えるのであるが、これらを通して、この「けん」の分類の使用状況を見よう。これらの語で文献にあらわれるのは(イ)が一番早く十八世紀初頭に既に表われるのである。まず大冠職の用例、
 ばあ、君けんくるけん、くるめあめいたかりんかんきう

については、其蹟の国姓爺明朝太平記に模倣採用されている点など不明な点が多い①様だから割愛するとしても、確実な用例としては次の博多小女郎波枕のそれがある。

上方衆は気が良かけん、此様な事は有まい」と、②

これは上の巻で、長崎生れと称する毛剃九右衛門のことばであるが、この人物は他に、形容詞カ語尾、助詞「ばい」・「ほん」・「きなへ」・「たん」・「がい」など、九州方言の標識となるべきものを盛んに使っているのを見ると、当時この「けん」が既に九州（主として長崎及びその近郊）地方のことばと近松は知っていたものと思われる。あるいは殆んど同時代の不確実なものとして採らなかつた先の「けん」もこの際参考になるであろう。かくして、この「けん」は、これ以後例えば花暦八笑人にも

棒を心がくるを見れば、総州香取辺の省じやるけん、③
とみえ、更に一九世紀前半の佐賀方言資料たる伊勢道中不案内記にも、主人公愚津の供人として、くだけた佐賀言葉を盛んに口にする重八、久米蔵の二人によって、
都てーるーテ、着め言葉さへ知らぬもんちやつけんが………

(三四一)重八

わさんのとつつけもなうやつけんくそう(三四一)久米蔵と語られている。更に現代方言としての使用が他の語を圧している④ことを考えると、この語が江戸末期にも使われていた事を十分考えさせられる。

この「けん」に次いで文獻に見えるのは、(回)の「けへ」であるが、これは「けん」に遅れること約九〇年、一九世紀初頭の浮世風

呂に

鯨ども洗ふた跡どもの如あるけへ、奇妙な句ひ、⑤
此のたりやあるけへ、わりどもしよちてにきい、
奥に打込で有けへ、自己所持の手拭、愛さ掛置くた

い⑥

と始めであらわれている。そしてそれ以後、伊勢道中不案内記にも用例がみあたらず、一寸見た夢物語にもわずか一例、しかも社人によつて使われている事を考えると、この語は当時余り使用されていなかったのではあるまいかと思われる。僧侶あるいは神官などの言葉が格式ばつた語を使用する事は既に指摘されている事である。

次いで(回)の「けへに」が約一〇年遅れて伊勢道中不案内記で重八、銀作のことばに、

おでんちふけえに、何に持つて来るかと思へば、(二八二)重

八

わさんのヤクたヤーもなか事言ふけーにくそう(三〇〇)銀作などと語られている事は、この語が一般的に使用されていた事を示しているし、これが更に降つて一寸見た夢物語にも他と比べて十一例という多きを数える事ができる。

以上、「けん」の一類について、その使用を述べたが、これを纏めて次の様に言える。理由を示す接続助詞は、江戸末期(回)「けん」(回)「けへ」、(回)「けへに」の各語が佐賀地方に存していた。これらのうち、(回)「けん」はその成立も古く、また現代方言では他を圧して使用されている事を考えると、江戸末期佐賀地方で盛んに使われていた事を思わせるが、実はそうではなく、ずっと遅れてあらわれ、しかも現代方言では殆んど使用されていない(回)「けへに」が、

その地域を限らず佐賀藩内で一般的に使用されていた。ただし、この「けへ」は一時的に盛んに使用されたに過ぎなかった。(四)「けへ」はその成立は「けへ」より早かつたけれども、江戸末期には殆んど用いられなかった、少くとも一般的でなかったようだ。

【二】、「ぎい」

これは「けん」と同じく理由を表わす接続助詞であるが、これが一寸見た夢物語に一例佐賀の女姓のことばの中に

おッ達のた新小屋のちよふりんばふのテ、いふギイ(五九) 佐賀女

と見えている。この語は前述の「けん」と違ってこの当晤の方言資料たる伊勢道中不案内記及びそれ以前の九州(主として肥筑)方言資料に見えないので、恐らくその成立は余り古くないものと思われる。時代的に言うるとこの例をもって始めとする様である。この語は現代佐賀地方に多く使われ、例えば分類方言辭典に「行ッギ、行くと。佐賀県。」^(一)と見えており、現在、佐賀、長崎県の代表的な接続助詞であるが、その上眼をこの「ぎい」は示すもので、江戸中期には余り用いられなかったものと思われる。なお、この語の成立については北条忠雄氏が「ギニヨイテハ」→「ギニハ」→「ギイ」→「ギー」とされた^(五)。

【三】、「ばってん」

これは良く知られている逆接の接続助詞であるが、これが一寸見た夢物語はわずか一例、しかも

あ**い**ば**つ**て**ん**些々上白もんの居る所にも居たて見るばん(五

八) 諫早

と接続詞として用いられているに過ぎない。現在あれば多く接続助詞として用いられ、肥筑方言の手札の如く言われているこの語が当時この文献に一例しか見えず、しかもその用例が諫早者の使用である事は不思議の念を抱かせる。しかし、同時代の佐賀方言資料たる伊勢道中不案内記に、久米蔵、銀作の二人がこの語を

せからしかば**つ**て**ん**、金の入つとるばん(二二二) 久米蔵
そりヤアさうぢやらうば**つ**て**ん**、此の男が了箇違ひではめば**つ**
がい、(三〇〇) 銀作

などと、かなり使っている所から、勿論江戸末期佐賀地方でこの語が使用されていた事は容易に想像できる。この語の成立については、世事百談(一八四一)で山崎美成が

ばとてといふ詞ことばの國のなまりにば**つ**て**ん**となるなり。^(四)

と指摘しているのが妥当であるけれども、この語が作品にあらわれるのは案外遅く、私の知る限りでは柳川方言河沙一撮に出て来る次の例が最初である。

めん／＼なくうしやめひたこ**つ**は**つ**て**ん**國かたのくうぜうな江
戸のわつさんたちならはすは**つ**て**ん**^(四)

こかしの俳諧なりば**つ**て**ん**まあたよか口上な^(四)

よかはいといつせんだんもしやるくかん残暑ば**つ**て**ん**月の涼し
か^(四)

とつきんしからすば**つ**て**ん**しやんすしうなけにあげめしはぎ
やあふばい^(四)

河沙には右の如くこの語はすべてで五例見えるが、しかしその用

例をみると、その使用法は非常に自由で、一つもぎこちなさは感じられないこと、しかも「ばつてん」の母体と感じられる「ばとて」の用例がこの書に全く見えないことから、この書が成立したと思われる江戸中期よりも以前④に「ばとて」から「ばつてん」へと変化したと思われる。しかしこの涇河沙の成立年代が明確でない所から連断は避けねばならない。

ところでその変化は何時頃行なわれたであろうか。私をこれを江戸初期、少くとも近松以後と思う。その理由は、何としても近松の博多小女郎波枕にこの語があらわれないことである。近松は先述の如く、博多小女郎波枕で生国長崎の九右衛門のこばに九州（主として肥筑）地方の言語標識となるべきものを載せているし、また彼は西鶴よりリアルなことばで表現し、関東方言や長崎方言、遊女ことばなどはつきり意識してとりあげている⑤ことを考えると、もし当時この「ばつてん」が出来ていたなら、恐らく彼はこれを記録したはずである。次にやはりこの事は、三馬が記録しなかったという点についても同じように考えられる。彼の記録の態度の厳正さ、あるいは実在的西国語の記載については有名であるが、その彼が例えば浮世風呂で多くの西国語を写しているのに、この語を写していないのはこの語がまだ出現していなかったか、あるいはあつたとしてもまだ彼の知らない程度の使用であつたに違いない。従つて先の元禄以後は三馬以後、つまり一八二〇年以後であろうと思われる。かくみると、柳川方言涇河沙の成立を、少くとも江戸中期（つまり一八世紀中頃）以前とする岩淵氏の推定は考え直さねばならないわけだが、少くとも江戸中期をこの語の成立の下限と考えることはでき

ないわけである。かくして成立したこの「ばつてん」は江戸末期の方言資料に次々と記されている。花暦八笑人（一八二〇）が先の涇河沙を除いては最初のものであり、次の如く、

後日御咎うしろごゑのうくるばつてん、慮外者りょがいものを手討にいたすは武士の常、^⑥

たへて勝負しょうぶせねばつてん、此まゝゆるすこと、まかいりならん。^⑦

と二例見えている。この二例は右の意味で重要なものと思われるが、これ以後次々にこの「ばつてん」は姿を見せる。例えば先の伊勢道中不案内記、世事百談、筑紫方言などこの語を載せている。

右の如く、この語の成立は「ばとて」から一九世紀に入って間もなく成立し、接続助詞としてその後自由に使われるようになり、江戸末期佐賀地方においても盛んに使われていたのである。

△注▽

- ①九州の方言 吉町義雄（「国語科学講座」六卷三七頁）
- ②有朋堂文庫「近松淨瑠璃集」下巻四一七頁
- ③日本名著全集「滑稽本集」七六五頁
- ④(イ)の報告は見えないが、(ロ)は「全国方言辞典」のみ（しかも佐賀地方の報告はない）見えるのに対して、(ハ)は佐賀方言書には必ずみえる。
- ⑤岩波文庫本「浮世風呂」二八八頁
- ⑥同右書二九頁
- ⑦東条操編「標準語引 分類方言辞典」七一四頁
- ⑧仮定をあらはす「ギー」の考察

「九州方言語法小論」 北条忠雄

(「方言研究」発会記念号一五〇一六頁)

⑨ 「百家説林」正編下所収「世事百談」一五七頁

⑩⑪ 柳川方言湟河沙一撮 岩淵悦太郎(「方言」昭和八年二月号一三四頁)

⑬ 同右書一三五頁

⑭ 同右書一三六頁

⑮ 同右書一三三頁

⑯ 杉本つとむ「近代日本語の成立」一〇八頁

⑰ 注③書参照

⑱ 同右書七六六頁

以上